

「第25回住まいのリフォームコンクール」総評

本コンクールも今回で25回という節目を迎えた。この間の社会の激変ぶりに驚くと同時に、住宅リフォームの役割がこれ程までに高まったこと、期待されていることに改めて深い感慨を覚える。関係者の御努力に敬意を表したい。

今年度の応募総数は616件、うち戸建420件、共同建・連続建196件で、昨年度よりも48件減である。戸建は大幅に減少したが、共同建・連続建は東京・神奈川を中心に増加した。景気減速の傾向にもかかわらず、都市部のマンションリフォームが盛んな証拠で、団塊世代のリフォーム需要の旺盛さ、あるいは緊急さが窺える。該当部分の全体平均工事費は、昨年よりやや下がったものの、依然1000万円を超えており、高額化の傾向が続いている。

今年の大賞には、久々にマンションリフォーム案を選出した。特別賞の4案、またいくつかの優秀賞案は、いずれも内容が紙一重で、評価が逆転・再逆転した。内容もこれからのリフォームの方向を見据えたもの、街づくりにつなげようという提案、古民家建築の再生など多彩である。本年度の応募案全体としての目立った特徴というものはなかったが、審査にあたっては以下の三点が特にポイントとなり、議論白熱の因となった。

第一は、「エコロジー」や「環境配慮」を意識した記載が多かった点である。応募内容をまとめる時期が洞爺湖サミット直前であったことも影響しているのであろうが、従来、プランや空間の目新しさだけで判断されがちだったリフォームにも、「目に見えない温熱環境」や、「地球益を意識した造り方」などが強く配慮されるようになってきたものであり、歓迎すべきことである。性能記述欄でも環境性能に係るものが、記述全体の1/3近くを占めている。ただし環境配慮の内容そのものは、高性能の省エネ系設備機器・サッシとか、風通しの良いプラン、日射遮蔽を意識した仕掛けなどによるものが多く、新鮮さには欠ける。個人住宅のリフォームで、建て主に環境性能への理解を求めるのは難しい面もあるが、少なくとも造る立場の人は意識してほしい。せっかくの高性能なハードウェアを建替えまでのつなぎで終わらせないためにも、サステナビリティを住み手に意識させ、誘導できるだけの内容を目指してほしいものである。

第二は、単体のリフォームであっても、街づくりや建築行政面の視点から評価すべきものが見られたことである。特に今年は、特別賞の審査の中で複数案が議論され、賛否が分かれた。見慣れた町の一角で、その地域周辺に異質な変化を与える可

能性があるリフォーム、あるいは住み手の確定しないリフォームなど様々なタイプが生じ始め、地域全体への影響力も大きくなってきたということであろう。

第三は、適法性に絡む問題である。ここ数年、小規模建築設計事務所からの応募案が増え始めた。その中で、我々は、適法性への意識の低さが散見される点を指摘し続けてきた。今年も、素晴らしい内容でありながら違反が判明して落選する例が複数あった。設計事務所は本コンクールに毎年連続して応募するケースが少ないため、我々の苦言が伝わりにくいのかかもしれないが、プロ意識の問題であるので熟慮を促したい。

その一方で、徐々にではあるが、現行法規では量りきれないような、新しい住空間や住タイプへの志向・提案も見られるようになった。混沌の時代には新しい空間タイプが生まれる。保守的な人の目には理解しにくいだが、第二の点などとも合わせると、この傾向は確実に強くなっている。特にリフォームでは、事業者の多様化や、住み手側の自由な発想などにより、顕在化のスピードが速い。第1回のコンクールからほぼ四半世紀を経て、リフォームは住宅デザインの最先端へ躍り出ていると云えよう。

第25回住まいのリフォームコンクール審査委員会
委員長 上杉 啓

